

モモの仕上げ摘果

県北農林事務所伊達農業普及所
J A ふくしま未来伊達地区モモ生産部会

双胚果の発生が、平年よりも多く確認されています！
各園地の発生状況を確認し発生が多い場合は、仕上げ摘果時にやや多めに果実を残し、障害の発生状況が明らかになる硬核期後の修正摘果で適正着果量にしてください。

1 気象経過

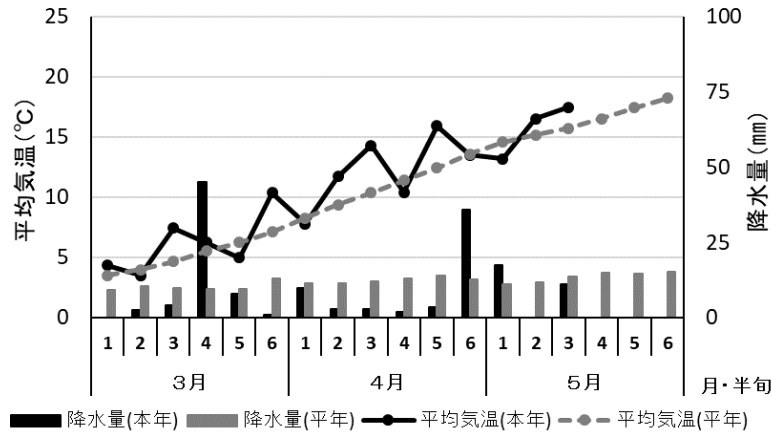


図1 平均気温と降水量の推移(伊達市梁川)

2 土壌水分

5月12日時点の土壌水分(pF値:果樹研究所ナシ園地:草生・無かん水)は、深さ20cmで2.6、深さ40cmで2.1、深さ60cmでは1.9となっており、深さ20cmでは乾燥が進みつつある。

3 核障害及び双胚果の発生状況について

農業総合センター果樹研究所(福島市飯坂町平野)における満開後30日の「あかつき」の核障害及び双胚果の発生状況について、核障害発生率は20.0%(平年36.6%)であり、平年に比べ少ない傾向にある。一方で、双胚果発生率は30.0%(平年7.2%)となっており、平年に比べ多い状況である。

4 栽培管理

(1) 仕上げ摘果

各園地の双胚果等の発生状況を確認してから、仕上げ摘果を実施してください。

果実肥大に差がつく満開後40日頃から実施する(表1)。摘果の程度は最終着果量の2割増程度とし、樹勢や双胚果、核障害の発生状況を見ながら加減する。図2に示したように核頂部に断裂などの重度の障害を生じた果実は、満開後45日頃になると果頂部の片側の肥大不良が目立ってくるので、果形に注意して仕上げ摘果を実施する(図3)。

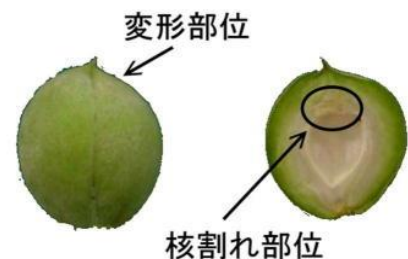


図2 核頂部の障害と果頂部の変形

表1 満開日から予測した「あかつき」の摘果時期の目安（満開日：4月13日）

作業内容	時期	備考
仕上げ摘果	5月23日～6月2日頃 (満開後40～50日頃)	最終着果量の20%増とする。
(硬核期)	6月5日～6月22日頃 (満開後53～70日頃)	障害果の発生を助長するので摘果作業を控える。
修正摘果	6月23日頃～収穫期	硬核期終了後に2～3回程度園地を見回り、小玉果、変形果、病害虫の被害果などを摘果する。

※硬核期は満開後の気温が高く経過すると時期が早まるので注意する。

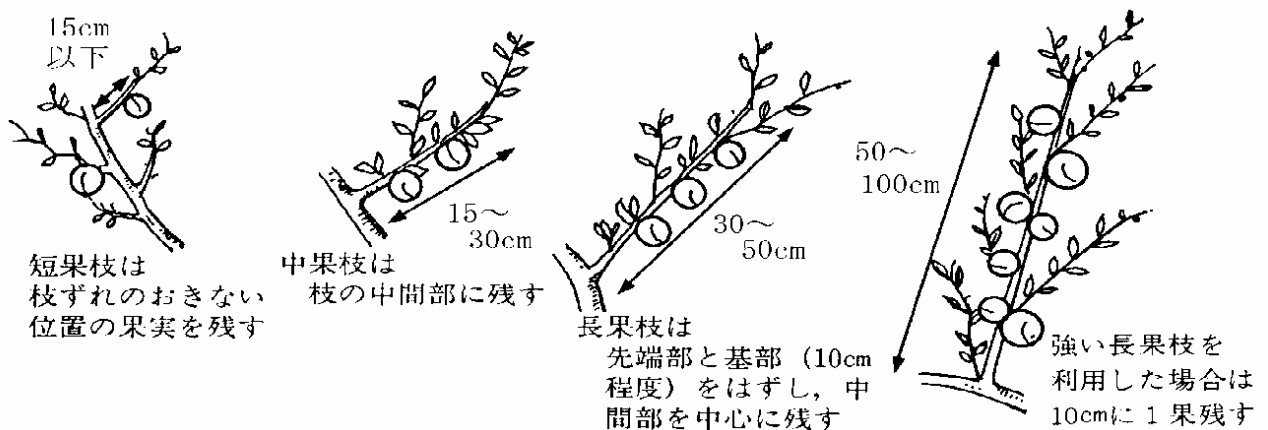


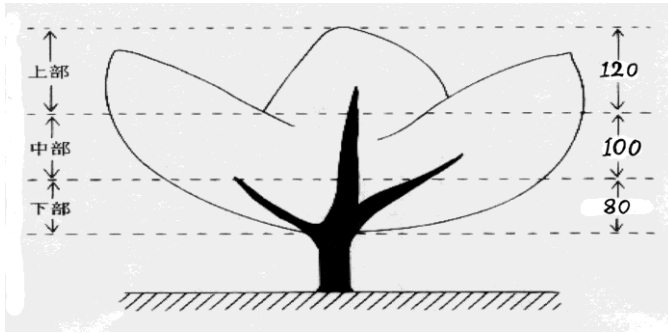
図3 仕上げ摘果の方法

◎仕上げ摘果のポイント

- ①双胚果や核障害の発生が多い場合は、一気に仕上げず、障害の発生程度が明らかになる硬核期終了後から、果形（果頂部）を確認して核障害果を摘果する（図4）。
- ②せん孔細菌病の発生が多い場合には、やや多めの着果数を確保し、修正摘果で重点的に摘果する。
- ③凍霜害等の影響で結実の少ない樹では、果形の良否が判断できる段階で仕上げ摘果を行う。
- ④上枝の果実は、糖度、肥大ともに良好であるため、上枝は2割多く、下枝は2割少なく着果させる（図5）。ただし、凍霜害で下枝の着果量が少ない場合は、上枝の結実量を着果基準の30%増しを上限とし、着果数を確保する。
- ⑤「ゆうぞら」等の生理落果が多く玉揃いの悪い品種では、仕上げ摘果時にやや着果数を多めとし、修正摘果時に最終着果量とする。
- ⑥樹の生育状況を確認し、樹勢に応じて着果数を調節する（表2）。
- ⑦果実に付着している花カス（ガク片等の残り）は、灰色かび病の原因になるので除去する。



図4 摘果する果実の目安



※上枝は糖度、肥大とも良好であるため、上枝は2割多く、下枝は2割少なく着果させる。

図5 樹冠内における着果のイメージ

表2 摘果の目安

樹勢	仕上げ摘果	修正摘果①	修正摘果②	※着果指数
強い	最終着果量の30%増し	最終着果量の10%増し	1～2回に分けて、	110～120
普通	最終着果量の20%増し	最終着果量の5%増し	发育不良果、変形果、病虫害被害果を	100
弱い	最終着果量の10%増し	最終着果量とする	除去	80～90

※適正樹勢の着果量を100とした場合の着果割合

(2) 樹勢維持(回復)対策

今年は、例年よりも多くの花芽が開花したことから樹に負担がかかり、樹勢に影響が出る可能性があります。樹勢が低下している園地では、適宜対策を心がけてください。

樹勢を維持するため、早めの摘果作業を心がけるとともに、必要な着果数まで速やかに摘果し、新梢の生育を促す。また、乾燥傾向にある園地では積極的にかん水を実施するなど、土壌水分の確保に努める。

なお、灌水しても新梢伸長が劣り、葉色が薄いなど樹勢低下の状態が回復しない園地では早めの摘果作業を行うとともに、5月中に窒素成分を含む葉面散布剤を使用する。

(3) 新梢管理

樹冠内部や主枝、亜主枝の基部、側枝の基部等から発生する徒長しやすい新梢は、早めに摘心や夏季せん定を実施し、適正な樹体管理を心がける。ただし、徒長枝せん除をやりすぎると二次伸長を誘発するため、樹冠下の木もれ日具合が20%程度になるように意識して行う。

なお、樹勢の弱い樹については葉面積の確保を優先し、夏季せん定は行わないか最小限とする。

(4) 袋掛け作業

着色促進、品質向上及びせん孔細菌病対策を目的に実施する。「あかつき」において、せん孔細菌病対策を目的に実施する場合は、仕上げ摘果時に袋掛け作業を速やかに実施する。袋掛けは中晩生種以降の品種を中心に行い、除袋までの期間を最低でも25日確保できるように被袋する。なお、「川中島白桃」等の白桃系は袋がけが早すぎると、袋内での生理落果をかえって助長するため、生理落果が一段落してから行う。

表3 袋の種類と除袋時期の目安

品種名	袋の種類	除袋時期	予想収穫時期
あかつき	SK-2 (V切れ電話帳中黒一重袋)	7月12日頃	7月22日～
	ぱりっと撥水ミニ (V切れ二重袋)	7月8日頃	7月22日～
川中島白桃	ぱりっと撥水ミニ (V切れ二重袋)	7月28日頃	8月11日～
黄金桃	きらめき6 (V切れ外灰中黒一重袋)	除袋しない	
さくら等 大玉系極晩生種	ピーチ極晩生二重袋	収穫14日前	

※予想収穫時期は平年の満開後日数による予測日。

(5) 土壌管理

ア かん水

1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)を目安とし、5～7日間隔で実施する。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くする。

イ 草刈り

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行う(地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされる)。

ウ マルチ

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努める。

4 病害虫防除

(1) 直近の防除内容について

農薬散布に当たっては、JAの果樹病害虫防除暦を参考に、最新の農薬登録情報を確認のうえ行う。また、この期間は梅雨時期となるため、雨前散布を心がけるとともに、散布間隔が長くならないように注意する。

表4 薬剤散布時期(第7回～第8回)の目安(「あかつき」の満開が4月13日の場合)

散布回数	散布時期	主な対象病害虫	使用薬剤	濃度	備考欄
第7回	5月30日頃	せん孔細菌病	マイコシールド	2,000倍	注1
		灰星病、黒星病	チオノックフロアブル	500倍	
		モモハモグリガ	フェニックス	4,000倍	
		シンクイムシ類	フロアブル		
		ハマキムシ類			
コスカシバ					
第8回	6月9日頃	せん孔細菌病	バリダシン液剤5	500倍	注2
		灰星病、黒星病	ダコレート水和剤	1,000倍	
		ホモプシス腐敗病			
		果実赤点病			
6月上旬～中旬		コスカシバ	バイオセーフ		注3

注1：有袋栽培では薬剤散布後、速やかに袋がけを行う。

注2：シンクイムシ類が多い園地では、「ダイアジノン水和剤34 1,000倍」を散布す

る。

注3：バイオセーフの使用方法については、JAの令和4年版果樹病害虫防除暦を参照する。

表5 薬剤散布時期（第9回～第10回）の目安（「あかつき」の満開が4月13日の場合）

第9回以降は、収穫時期の都合上、極早生種・早生種とそれ以外の品種で異なる内容となっているため注意する。

			極早生種・早生種		中生種・晩生種		備考欄
散布回数	散布時期	主な対象病害虫	使用薬剤	濃度	使用薬剤	濃度	
第9回	6月19日頃	せん孔細菌病	—	—	マイコシールド	2,000倍	注4
		灰星病	ベルクート水和剤	1,000倍	ベルクート水和剤	1,000倍	
		ホモプシス腐敗病					
		果実赤点病	バリアード顆粒水和剤	2,000倍	バリアード顆粒水和剤	2,000倍	
		モモハモグリガ					
シンクイムシ類							
第10回	6月29日頃	せん孔細菌病	—	—	バリダシン液剤5	500倍	注5
		灰星病、黒星病	オンリーワンフロアブル	2,000倍	ダコレート水和剤	1,000倍	
		ホモプシス腐敗病					
		果実赤点病	—	—	テッパン液剤	2,000倍	
		ハマキムシ類	テッパン液剤	2,000倍			
シンクイムシ類							

注4：極早生・早生種では、マイコシールドを散布しない。

注5：早生種では、バリダシン液剤5を散布しない。

○表4、5の農薬使用法は令和4年5月11日現在の農薬登録内容に基づき記載した。

○散布回数の記載はJAの令和4年版果樹病害虫防除暦に準じた。

○展着剤は適宜加用する。

○その他の注意点はJAの令和4年版果樹病害虫防除暦に従う。

(2) 病害

ア モモせん孔細菌病

春型枝病斑の発生が増えてきています。せん除の徹底をお願いします！

春型枝病斑の発生は昨年よりも増加傾向にあり、気温の上昇につれて更に増えてきていることから、耕種的な対策の実施（枝病斑、葉や果実における発病部位の除去）と計画的な薬剤防除を徹底する。

イ ホモプシス腐敗病

6月の梅雨期から、ホモプシス腐敗病の胞子の飛散時期になるため、十分な量の薬剤を散布するとともに、越冬源となる枯れ枝を丁寧にせん除する。

ウ 灰星病

早生種など収穫期が近い品種は、灰星病の重点防除時期になるため、散布を徹底する。灰星病に感染した果実は2次伝染源となるため被害果は見つけ次第、土中に埋めるか園外に持ち出す。

(3) 害虫

モモハモグリガ、ナシヒメシンクイ等の発生時期は生育と同様に早まっているため、散布時期が遅れないように注意する。

また、モモの生育に合わせて主要害虫の発生も早まっており、気温変動の影響により発生状況も変動していることから、JA から出される最新の果樹情報を参考に、防除時期を決定する。

◎近年増加している気象災害に備えるために、収入保険の加入を検討しましょう！

◎防除日誌への記載漏れの無いように農薬散布後は、忘れずに防除日誌へ記帳しましょう。

◎農薬散布の際は隣接する作物に注意し、飛散しないように注意しましょう！

◎適切な生産工程管理のためにGAPシートで確認しましょう

◎農作業事故に注意して作業を進めましょう！